

幼児教育におけるESDの展開と今後の展望：
ASPUuviNetの支援とユネスコスクールの取り組み

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田宮, 縁 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00024654

幼児教育における ESD の展開と今後の展望

APSunivNet の支援とユネスコスクールの取り組み

田宮 縁*

A Case Study on Efforts of UNESCO schools in Shizuoka City and Support of APSUnivNet

Yukari Tamiya*

要旨

本稿では、静岡市立幼保連携型認定こども園4園と市独自の「こども園」1園（いずれも静岡市立幼稚園を前身としている）のユネスコスクール加盟のプロセスとその後の展開の背景となる要因を分析した。その結果、教員のキャリア形成や研修体制のあり方が鍵となってくること、ユネスコスクールへの支援体制の充実が ESD の推進拠点としてユネスコスクールの自立を促すことにつながるということが示唆された。また、ESD の視点から他校種とのカリキュラムの接続が可能となるという展望も示された。

キーワード：幼児教育 ESD ユネスコスクール APSUnivNet 他校種との接続

1 はじめに

2017 年 3 月、幼稚園教育要領、小学校学習指導要領、中学校学習指導要領が改訂告示された。新たに加えられた前文は、各校種、幼児、児童、生徒など表記の差はあるものの整合性が図られており、「持続可能な社会の創り手となる」という文言が示されている。

(略)

これからの学校には、こうした教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。このために必要な教育の在り方を具体化するのが、各学校において教育の内容等を組織的かつ計画的に組み立てた教育課程である。

(略)

(文部科学省,2017,p.24¹⁾)

このことは ESD (Education for Sustainable Development) の理念をベースに教育を行っていくと理解してよいだろう。

幼児教育の ESD に関しては、「わが国では、小・中学校の教育において ESD の取り組みが積極的に行われているが、幼児期の取り組みは極めて少ない」

(白石・加藤,2016) との指摘もある。確かに、ユネスコスクール²⁾ 加盟校は、国内の加盟校は 1034 校に

対して幼児教育施設は 30 校 (2017 年 10 月現在)³⁾ と少数である。

一方、蘇我 (2016) は、「幼児教育は ESD との親和性が高い」と述べ、「身につけたい資質や能力が先立ち、そのためにどのような教育活動を展開したらよいかが議論の対象とされることが少なくない」と述べた上で、ESD は、単に授業論にとどまるものではないとしている。つまり、人間性の涵養や関係性を重視した価値観を基盤とした行動変容により持続可能な社会の創造を目指している ESD は、環境を通して総合的に学んでいくと幼児教育の考え方や方法との親和性が高いということである。

ユネスコスクール加盟申請については、管理職のリーダーシップのもと加盟に至るケースも多いが、一方、教育委員会がリーダーシップをとり、市内の全公立小学校で加盟している地域もある。しかし、加盟に至るまでのプロセスとその後のユネスコスクールとしての実践の展開を示した研究は、筆者が調べた限りでは見当たらなかった。

本稿では、実践者の思いからユネスコスクール加盟に至った静岡市立幼保連携型認定こども園4園と静岡市独自の「こども園」1園（いずれも静岡市立幼稚園を前身としている）⁴⁾ のユネスコスクール加盟のプロセスとその後の展開をもとに、その背景と幼児教育における ESD の展開と今後の展望について考察していくことを目的とする。

2 方法

筆者の所属する静岡大学教育学部は、2013 年に

*静岡大学教育学部

ASPUivNet（ユネスコスクール支援大学間ネットワーク）⁵⁾に加盟し、静岡県教育委員会、静岡市教育委員会ほか関連機関と連携しつつ ESD の推進、県下のユネスコスクール加盟支援と ESD の普及などの活動を始めた。さらに、本学部では、2016 年度より文部科学省補助事業ユネスコ活動費補助金を受け、ESD・国際化ふじのくにコンソーシアム⁶⁾（以下、コンソーシアム）を立ち上げた。

筆者は、ESD・国際化ワーキンググループ（以下、ESD・国際化WG）のメンバーとして上記の2つの事業に参加し、幼児教育への支援を行ってきた。本稿では、当事者である筆者の視点からまとめた資料をもとに現象学的アプローチにより考察を加えていく。

3 結果

（1）ESD との出会いの場の創出ー2013 年 11 月

実践者の ESD との出会いは、ある幼稚園教諭の「これからの公立幼稚園の生き残る道」について自主的な研究会で話をしてほしいという筆者への依頼から始まる。「生き残る道」とは大げさにも思えるが、2015 年からスタートする子ども・子育て支援新制度がその背景にある。

2012 年に子ども・子育て支援新制度に向けて、いわゆる「子ども・子育て関連3法」が公布された。これにより、「就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律」が大幅に見直され、なかでも、新しい「幼保連携型認定こども園」に関する規定が大幅に追加された。

改正のポイントについて、森上（2017）は、「①これまでの認定こども園の課題であった二重行政の解消、②幼保連携型認定こども園について、単一の施設として認可・指導を一本化したうえで、学校教育及び児童福祉施設としての法的な位置付けを持たせることなどがあるが、既存の幼稚園及び保育所からの移行は義務づけず、新たな幼保連携型認定こども園の設置主体は、国、地方公共団体、学校法人または社会福祉法人としている」と述べている。

既存の幼稚園・保育所の幼保連携型認定こども園への移行は義務付けられていたものではなかったが、静岡市は、2015 年度より公立の幼稚園と保育所をすべて幼保連携型認定こども園と静岡市独自の「こども園」に移行させた。私立も合わせた認定こども園の数は72 園となり、新制度移行にあたっての幼稚園・保育所からの移行数は、政令指定都市で最多⁷⁾となる。静岡市の幼稚園・保育所の認定こども園化が、十分な準備期間もなくドラスティックに展開されたかは察するに余りある。

このような状況のもと、「生き残る道」という言葉を用いた教諭の心情を理解することは容易である。そ

こで、筆者からは、学術的な文脈で「森のようちえん」を日本に初めて紹介した百合草禎二氏（今村,2011）も研究会に招聘してほしいという依頼をした。ユーリア・エンゲストロームの『拡張による学習：活動理論からのアプローチ』の翻訳者の一人でもある百合草氏に、活動理論を背景としながら、ドイツの「森のようちえん」での教育、そこでの子どもの体験や経験について語っていただいた後に、「これからの公立幼稚園の生き残る道」について提案をすることとした。

11 月 22 日に行われた研究会での提案の概要は、以下の通りである⁸⁾。

静岡市立幼稚園は、子どもを主体とした、遊びを通して総合的に学ぶ実践がなされており、子どもの発達に即した教育を行っている。また、園舎・園庭環境、物的環境、自然環境、幼小連携、地域とのかかわりなど充実した保育環境も有している。特に、人的環境はすばらしい。静岡市立西奈幼稚園の学校評議委員会で、参観後の会議の席で前 PTA 会長の K さんが述べられたエピソードの一部を紹介する。

園全体でのお店屋さんごっこ。5 歳児がお店屋さん、3 歳児がお客さん。普段は女兒 3 人で美容院をやっていますが、今日は一人休みでした。

「どの人がいいか指名してください。K さん」と A 子ちゃん。もう一人の B 子ちゃんも指名してほしいという気持ちが十分に伝わってきましたが、誘われた A 子を指名しました。普段は自己主張のぶつかり合いが多く、葛藤場面も多いと聞いていましたが、お客さんの前ではトラブルは見えません。

いざ、紙でつくったはさみで髪の毛を切ろうとすると、どこかへ置き忘れてきたようで、美容師の命である A 子ちゃんのはさみは見当たりません。そこで、A 子ちゃんは、B 子ちゃんにお客さんを任せ、自分のはさみを探しにいきました。お客さんは待たせません。さすが、プロです。A 子ちゃんのはさみを見つけてきたところで、美容師は交代。「かわいくしてください」と私が言うのと、A 子は「もともとかわいいですよ。K さん」と対応してくれました。子どもたちは、私たち大人の姿をよく見えていますね。...（K さんの語り逐語録）



人と人のかかわりの中で、どのように大人が

仕事に取り組んでいるのかを、幼児は見て学んでいることがわかるエピソードである。地域社会とのつながりの中での実体験があつてはじめて、このようなごっこ遊びが成立する。幼児は自由な雰囲気の中で、自分の体験してきたことを再現しながら、演じる相手の気持ちを理解したり、役割を考えたりしていく。このようなごっこ遊びが展開できるのも静岡市立幼稚園の教師が幼児の主体性を大切にしているからである。また、子どもの姿をきちんと受け止めることができる保護者の存在も大きい。幼児を取り巻く人的環境は静岡市立幼稚園の誇れるところである。

(略)

このように静岡市立幼稚園は、教育的な資源を十分に活用し、質の高い保育を実践しているが、保育実践とその価値を広く発信しているとはいえない。静岡市の子どもの健やかな発達を保障するためには、静岡市立幼稚園の存在感を確かなものにしていくことが必要なのではないか。幼児教育関係者だけではなく一般市民を対象に情報発信をしていく際には、めざすべきイメージを明確にし、市民を意識した理念や実践の伝え方も必要である。幼児教育関係者だけが理解する言葉ではなく、小学校以上の教員や一般市民にも理解できる「共通の言葉を持つことが必要」なのではないか。

前述の西奈幼稚園の実践の通り、静岡市立幼稚園では、すでに ESD を実践しており、学びのベースとなる「地域・学校・専門機関との連携」も図られている。ユネスコスクールに加盟することで「情報発信」「共通の言葉を持つこと」が可能になると考える。

当日の参加 43 名の先生方は、ESD という視点からご自身の実践を振り返り、質問の時間には数名の方から具体的な質問がなされた。

後日、東豊田幼稚園園長から、園長会で説明してほしいとの連絡があり、2013 年 12 月 13 日の園長会にて芳賀正之氏（静岡大学教授/ESD・国際化 WG）と筆者が出向き、園長会の冒頭 10 分程度で、11 月 22 日の研修会と同様の内容を短縮し説明するに至った。

園長会では、全園、ユネスコスクール加盟の方向で進めていくということ、ユネスコスクール関連の窓口を東豊田幼稚園園長とすることが確認された。そして、申請書作成の作業に入っていく。

（2）ユネスコスクール支援と ESD の広報

1) ユネスコスクール加盟申請書の作成

まずは、全幼稚園（14 園）の経営書に記載されている園外保育年間計画の写しを提出していただき、以下の 3 つの観点から精査した。

- ・地域性を生かした計画である。

- ・園外での活動と園内の活動の連続性が想起できる。
- ・園外保育と園外保育の系統性が読み取れる。

結果、東豊田幼稚園、清沢幼稚園、由比幼稚園の申請書の作成支援にあたることとなった。

この 3 園に対して、あらためて 3 つの観点で教務主任に対してヒアリングを行った上で、年間指導計画の中から、系統性を考慮し、代表的なプロジェクトを抽出した。

ESD テーマは、地域性と保育実践を反映させ、以下のように設定し、申請書のドラフト作成に着手した。

＜東豊田幼稚園＞

人と人とのつながり、人と自然とのつながり、自然と自然とのつながりを実感できる保育

＜清沢幼稚園＞

四季の変化と命を実感できる保育

＜由比幼稚園＞

地域の人・文化・歴史に誇りをもち、世界にひらく目を育成する保育

日本語版申請書を静岡大学教育学部で作成後、各園に確認を求め、英文に翻訳の作業に入る。作成過程では、池田恵子氏（静岡大学教育学部教授/ESD・国際化 WG）、芳賀氏も作成に加わり、2014 年 4 月申請に至った。

2) 静岡市立幼稚園教務主任研修会

2014 年 7 月、研修担当者からの依頼で教務主任研修会で ESD に関する講話を実施した。

- ・ ESD の理念とユネスコスクールの役割（田宮）

- ・ ESD プロジェクトを報告

（清沢幼稚園教務主任 高須史子氏）

ESD の理念を理解しても、実践者にとって自園や自校の実践を ESD の視点で検討したり、新たなエッセンスを加えたりすることは難しい。そのため ESD の研修会では、理念だけでなく、身近な ESD の実践を聞くことで、実践者に ESD の実践を立体的にイメージしていただけるようにプロジェクトの報告もあわせて行った。

3) 静岡県生活科・総合的学習教育学会での報告

2014 年 11 月静岡県生活科・総合的学習教育学会第 4 回研究集会にて、教務主任研修会報告した内容を中心に高須氏と筆者が報告した⁹⁾（「持続可能な社会の実現のための保育～静岡市立幼稚園の取り組み」）。詳細は、以下の通りである。

1 はじめに

ESD（Education for Sustainable Development）とは、「持続可能な開発のための教育」と訳され、環境、平和など地球規模での現代的課題を自らの問題と捉え身近なところから取り組むことにより、それらの問題の解決に繋がる

新たな価値観や行動を生み出すこと、そしてそれによって持続可能な社会を創造していくことをめざす学習や活動である。また、ESD では、環境、平和や人権等の ESD の対象となる課題への取り組みをベースに、環境、経済、社会、文化の各側面から学際的かつ総合的に取り組み、他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識し、「かかわり」や「つながり」を尊重できる個人を育むことをめざしている（日本ユネスコ国内委員会,2013）¹⁰⁾。

現行の幼稚園教育要領、小学校・中学校・高等学校の学習指導要領には、持続可能な社会の構築の観点が盛り込まれており、ESD が教育の基盤にあることを読み取ることができる。特に幼稚園教育は、「環境を通して行う教育」を基本に「遊びを通して総合的に指導」することを重点の一つにあげており、ESD の理念との共通点を見出すことができる。

平成 27 年度からの「子ども・子育て支援新制度」のスタートに合わせて、すべての静岡市立幼稚園は「認定こども園」へ移行する。新制度の内容として、「質の高い幼児期の学校教育・保育の総合的に提供」することが第 1 にあげられているが、何をもって「質が高い」というのが新制度の説明では述べられていない。地域の環境とのつながり、活動と活動とのつながりなどを大切にしている静岡市立幼稚園の実践を ESD の視点から検証し、これから求められている幼児教育の一つの形を示すことが本報告の目的である。

2 方法

静岡市立幼稚園 14 園のうち、3 園（清沢幼稚園、東豊田幼稚園、由比幼稚園）を対象とし、その園の特徴的な他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識できる「つながり」を重視した活動を洗い出す。さらに、活動間の「つながり」について検討し、各園の ESD テーマを決定した。

口頭発表では、清沢幼稚園の実践を中心に報告する。

3 実践例

（1）静岡市立清沢幼稚園

ESD テーマ「四季の変化と命のつながりを実感できる保育」

当園は、静岡市北部に位置し、地域人材、文化遺産等にも恵まれ山間地にある小規模な幼稚園である。幼稚園の周辺には、鮎や鱒などの川魚が生息している黒俣川などがあり、自然豊かな地域である。

このような教育的な資源を有効に活用し、「四

季の変化と命のつながりを実感できる保育」を実践している。

例えば、6 月の地域散策では、田んぼ付近を風景や雰囲気を楽しみながら、オタマジャクシを採集し、園内で飼育した。オタマジャクシがカエルに成長する様子を観察し、秋には生息地に返し、翌年、新たな命をつないでいくことを子どもたちは実感している。

このように地域の教育的な資源と小規模な幼稚園の持ち味を有機的に関連づけながら、「生活のなかで感性を育てること」を意識し、「つながりに気づく活動」を積み重ね、持続発展教育を実現している。

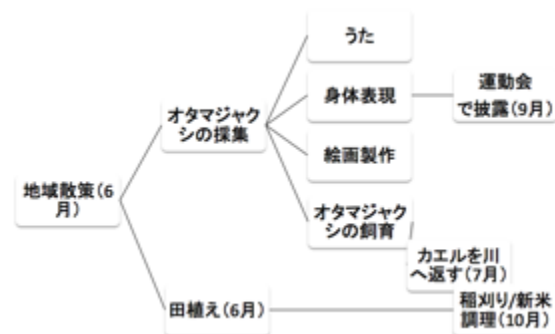
【実施計画】

(A)チャボの飼育（毎日）

現在、園内に 2 羽のチャボを飼育しており、春から秋にかけて毎日 2 つの卵を、ドーナツやスープなどに調理し、おやつや昼食の時にいただいている。昨年は、チャボが多数孵化したため、地域の方に譲った。その経緯を 5 歳児、4 歳児は知っており、卵は命そのものであり、卵をいただくことは命をいただくことであるということを実感している。

(B)地域散策～オタマジャクシの飼育～米作り～地域散策

（園外：5 日、園内 6～9 月毎日）



6 月の地域散策では、田んぼ付近を風景や雰囲気を楽しみながら、オタマジャクシを採集し、園内で飼育する。オタマジャクシがカエルに成長する様子を観察し、歌、身体表現、絵画製作など通して理解を深める。9 月の運動会では、身体表現を披露した。夏休み前に、カエルを生息地に返すが、体験の積み重ねがある子どもたちは、翌年もカエルが、新たな命をつないでいくことを実感している。また、田んぼ（在園児の祖父母所有）を借り、田植えをしながら泥の感触を楽しんだり、田植えのしかたを教えてもらったりする。10 月の稲刈りでは、新米をいただくことで収穫の喜びとともに命をいただき、自分が生きていることを体感する。また、お世話になった在園児の祖父母に

は、その都度、感謝の言葉を伝える機会を設けている。2月の地域散策では、「春みつけ」を合い言葉に、季節の移り変わりを感じる活動を行っている。

(C) 山女魚釣り～虫とり～どんぐり・落ち葉を使った工作(園外:2日、園内:10～12月)

地域にある養殖場で山女魚釣りをを行う。生きている魚に直に触れ、それを調理して食べる体験を通じて、命を実感する。また、同時期に養殖場付近の野原で虫とりをし、どんぐり拾いや落ち葉拾いも行う。拾ったどんぐりや落ち葉は、園内で工作に使用する。

報告は、清沢幼稚園を中心に行ったが、上記の通り、発表論文集には、東豊田幼稚園、由比幼稚園の実践も掲載した。報告者の高須氏は、27～29枚目のスライドで次のようなことを述べる¹⁾。

<27枚目>

最後に、私は、以前も清沢幼稚園に勤務していたことがあり、現在20歳を超えた、卒園児が時々遊びにきて幼稚園の頃の思い出を話してくれました。

その中で、子どもたちの心に強く残っているのは、地域の自然で遊んだことです。

川でいかだで遊んだこと、山の探検に行っていたのししが出そうで怖かったこと、いろいろな山を歩き回って伝説の天狗を探したことなど。

そして、みんな口を揃えて「あの時楽しかった」、「また、やってみたい」、「自分に子どもが生まれたら同じ体験をさせたい」と言います。幼児期の体験を今でも忘れず、地域のよさをしっかり感じ取っていたことに、少し驚きました。

その時は、自然とのかかわりを通して、感動体験や心を開放し豊かな表現力につながるような、子どもの育ちを求めているように思います。

<28枚目>

今、清沢地区は村の人口減少が進み、自然も荒れてきて、以前遊んだ場所では遊べなくなっている所がたくさんあります。

<29枚目>

卒園児の言葉を聞き、「未来の大人」、この言葉は、「ESD ユネスコスクール研修会報告書」の中で東京学芸大学の成田先生が使っている言葉ですが、清沢に育つ未来の大人に、幼稚園は地域の自然のよさや文化などの教育的資源の価値を、体験を通して知らせていく、役割を担っていることを実感しています。

当日、基調講演を行った野田敦敏氏(愛知教育大学教授)から「卒園児の言葉の重みは非常に重い。ESDの成果を表した言葉である」との講評があった。



4) 幼稚園の遊びと生活展

2014年12月5～7日、「幼稚園の生活展」が静岡ホビースクエアで実施された。

この時点で静岡市立幼稚園がすべて認定こども園に移行することはすでに決定されていたため、公立幼稚園で積み上げてきた実践を幼児教育の関係者だけでなく、他校種や一般への周知することが幼稚園側のメリットであり、かつ、静岡大学教育学部ではESDの広報を目的にイベントの企画がなされた。

2014年度当初から会場の選定が開始され、9月の企画案では「(仮称)ユネスコスクールの生活展」というタイトル企画がなされた。10月に「(仮称)幼児教育の世界～静岡市立幼稚園の遊びと生活展」に具体的なイメージが固まり、幼稚園には素材を提供してもらうというスタンスで、企画、運営はESD・国際化WGが行うこととなった。ポスターの素材のイメージは菓科幼稚園のペットボトルの筏である。



素材と活動のプロセスがわかる写真や解説の提供は、幼稚園、会場レイアウト・展示・広報資料作成、広報、報告書作成は静岡大学教育学部が担当することとなった。芳賀氏を中心に、川原崎知洋氏（静岡大学教育学部准教授）、名倉達了氏（静岡大学教育学部助教）の全面的な協力のもと運営がなされた。また、幼児教育専修の4年生も展示や受付、説明等にあたった。

会場については、静岡の地場産業であるホビーへの注目と静岡駅周辺という利便性からホビースクエアが選定された。生活展と同時に業者に木工を提供していただき、来場者が遊ぶワークショップコーナーを設けた。

主催者である静岡大学教育学部のこのイベントについての趣旨説明は、以下の通りである。

<ESD と幼児教育>

ESD（Education for Sustainable Development）とは、「持続可能な発展のための教育（持続発展教育）」と訳され、環境、平和など地球規模での現代的課題を自らの問題と捉え身近なところから取り組むことにより、それらの問題の解決に繋がる新たな価値観や行動を生み出すこと、そしてそれによって持続可能な社会を創造していくことをめざす学習や活動です。

ESDでは、環境、平和や人権等のESDの対象となる課題への取り組みをベースに、環境、経済、社会、文化の各側面から学際的かつ総合的に取り組み、他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識し、「かかわり」や「つながり」を尊重できる個人を育むことをめざしています。

幼稚園教育は、「環境を通して行う教育」を基本に「遊びを通して総合的に指導」することを重点の一つにあげており、ESDの理念との共通点があります。特に、静岡市立幼稚園では、地域の人々や歴史、文化、自然環境などとのつながりやかかわりを重視し、各園の特色を生かした子どもの主体的な遊びや生活を創造しています。

静岡大学教育学部は、ユネスコスクールのパートナーとしてユネスコスクールの活動を支援するためのASPUivNet（ユネスコスクール支援大学間ネットワーク）に加盟しています。

<つくって遊ぶ>

静岡市立幼稚園の遊びと生活の一コマを、ここ静岡ホビースクエアでみなさんに体感していただくことを目的に企画しました。

幼稚園教育は、環境を通して行うことを基本としています。人的環境、物的環境、自然や社会事象、人や物が相互に関連しあって醸し出す雰囲気、時間、空間など、子どもは周囲との環境に主体的にかかわりながらさまざまなことを学んでいきます。

この「環境を通して行う教育」は、一見、非効率的なようにも思われるかもしれませんが、「好奇心が旺盛である」という子どもの発達の特性を最大限に生かした教育方法なのです。

子どもの身近にあるものや自然、例えば、ダンボールや空き箱などの廃材、園外保育で拾ったどんぐり、栽培活動ででた芋のつるなどの素材から、子どもが自らの体験をもとにイメージしたものを試行錯誤しながら、形にしていきます。いかにおもしろく遊ぶことができるか、友だちと一緒に楽しむことができるか、そのプロセスに多くの学びがあるのです。

「幼稚園の遊びと生活展」では、十分につくって遊んだ「遊び作品」を展示してあります。「自由感」が保障された環境のもと、子どもたちが思い切って遊んでいる様子を思い浮かべながらご覧いただければ幸いです。

静岡大学教育学部

一般の来場者からは、「静岡市立の幼稚園がこんなにたくさんあるの。がんばっているじゃない」と驚きの声が上がったり、未就園児を持つ親からは、迷路やどんぐり転がしで遊んだり、水族館を飽きずに覗き込んだり子どもの姿を見て、喜びの声を聞くことができた。まさに「百聞は一見に如かず」という印象を否めない。実践発表ではなく、一般の人でもわかる形で、保育実践を可視化し、子どもから大人まで楽しめるようなイベントとなったと思われる。

3日間で330名の来場者があった。その中には、環境省環境影響調査員や報道関係者（静岡新聞2014年12月6日朝刊、情報誌『クルール』2015年2月号に掲載）の来場もあり、ユネスコスクールをめざす静岡市立幼稚園の実践の広報という意味では一定の効果を得られた。

また、このイベントに参加された環境省中川隆政氏より海洋教育夏期研修「地域環境と世界の海を知る」（2015年8月18～19日）の実践発表校として静岡市立由比幼稚園が推薦され発表に至っている。

5) ユネスコスクールへの加盟

2015年2月、申請中の3園がユネスコスクールへ加盟した。ESDを実践するパイロット校として地域の幼児教育をリードする立場となった。

（3）静岡から国内外への発信

1) 国際フォーラムへの参加

UGM（Universitas Gadjah Mada ジョグジャカルタ・インドネシア）における Education for

Sustainable Development Forum Promoting Sustainable Development through University and School Education: Good Practices に静岡大学教育学部として東豊田幼稚園園長 狩野尚美氏を招聘し、狩野氏は、筆者とともに実践を発表（ESD for Kindergarten :A Case Study of *Shizuoka City Higashitoyoda Kindergarten*）した。

狩野氏は、短期間ではあるがインドネシアでの生活や現地の学校の視察等を通して、水と紙の重要性を肌で感じ取ったとのことだった。後の実践では、幼児教育専修の学生の雑誌とコラムシを使ったハガキづくりをテーマとした研究、翌年の検証実験にも積極的に協力していただいた。

2) ユネスコスクール加盟申請

2015 年 4 月、静岡市立幼稚園と静岡市立保育園は、認定こども園へ移行した。

「幼稚園の遊びと生活展」の後、出展物などを吟味し、2 園の選定（久能幼稚園、和田島幼稚園）して、申請書の作成に着手した。10 月、こども園として静岡市立久能こども園、静岡市立和田島こども園のユネスコスクール加盟申請書を提出した。いずれの園も 2017 年にユネスコスクールに加盟した。幼保連携型認定こども園初のユネスコスクールである。

3) 海洋教育夏期研修「地域環境と世界の海を知る」実践発表

2015 年 8 月 18～19 日、水辺や海に関わる活動を通して、地球や地域の環境、ESD について学びを深める教育実践についての研修会が、教育新聞主催、日本船舶海洋工業学会海洋教育推進委員会共催で行われた。会場は、ユネスコスクールの東京都江東区立八名川小学校と横浜市の第三管区海上防災基地で行われた。発表は、東京都江東区立八名川小学校、横浜市立長田台小学校、滋賀県彦根市立城西小学校、福岡県大牟田市立みなと小学校、上越教育大学附属中学校、そして、静岡市立由比こども園である。

ユネスコスクールとして、2014 年度の実践「地域の特色をいかした保育実践～駿河の海の向こうにはどんなお国があるでしょか～」を由比こども園保育教諭堀池志乃氏が発表した。堀池氏の実践は、「幼児教育における ESD の意義と可能性～ユネスコスクールの実践の検討～」(田宮,2016) に詳細が述べられている。由比こども園の実践と発表の様子は、教育新聞に、2015 年 7 月 16 日（告知記事）と 2015 年 8 月 27 日に取り上げられた。

4) 「2015 年度ユネスコ中部東ブロックユネスコ活動研究大会 in 静岡」での研究発表

2015 年 9 月 12～13 日、日本平ホテルにて、「持続可能な社会のための教育「ESD」の推進～ユネスコスクールのさらなる普及をめざして」を大会テーマにユネスコ活動研究大会が開催された。

研究発表は、静岡市立玉川中学校、静岡サレジオ小学校、横浜国立大学附属鎌倉小学校・中学校とともに、東豊田こども園、清沢こども園、由比こども園 3 園合同で「“地域のひと・もの・こと”とのかかわりを通して」をテーマに東豊田こども園園長 狩野氏と由比こども園保育教諭 堀池氏が発表した。

5) 国際フォーラムでの広報活動

2015 年 10 月 31 日～11 月 1 日に名古屋国際センターで行われた The 10th EAST ASIA International Symposium on Teacher Education に筆者が参加し、ヤマモト・ルシア氏（静岡大学教育学部准教授）、中條曉仁氏（静岡大学教育学部准教授）、池田氏とともに Teacher Training based on ESD: Issues and Perspectives をテーマに口頭発表を行った。Initiatives by The Faculty of Education at Shizuoka University の中で、清沢こども園の実践を紹介、インドネシアでのフォーラムへの管理職の招聘や海洋教育夏期研修への実践者の招聘についての報告を行った。

（4）ユネスコスクールの自立への支援

1) ESD 夏期研修会での実践発表での課題

2016 年 8 月 26 日に実施の ESD 夏期研修会（神奈川県ユネスコスクール協議会主催）に和田島こども園を推薦した。認定こども園への移行により、元幼稚園教諭と元保育園保育士の異動があったため、ESD を理解するところから支援を行うこととなった。保育教諭の発表の形は整ったものの、ユネスコスクールとして ESD を推進するパイロットスクールとしてのさらなる ESD への理解と発信力の必要性が明らかになった。

2) ESD・国際化カフェ

コンソーシアム事業では、ユネスコスクールを会場に 3 名の大学教員による講演後、ユネスコスクールを中心に 2 校から実践報告をしていただいた後に 20 名程度でお茶を飲みながらディスカッションをするという新しい教員研修会の形（ESD・国際化カフェ・以下、「カフェ」）を提案し、11 月の金曜日に富士市立岩松北小学校、静岡大学教育学部附属島田中学校で実施した。当初の計画では、2 回の ESD・国際化カフェを計画していたが、幼児教育関係者からも ESD・国際化カフェをこども園でも行えないかとの要望があり、急遽、2016 年 12 月 17 日（土）に B-nest（静岡市産学交流センター）を会場に「幼児教育を考える」をテーマに行った。会場の定員 24 名を上回る参加者があった。当日、参加されていた和田島こども園園長（筑地純子氏）に、来年度のカフェは和田島こども園で開催したいと依頼をした。

3) コンソーシアム事業成果報告会

コンソーシアム事業の成果報告会では、実践報告では、静岡市立岩松北小学校、掛川市立北中学校、静岡県立下田高等学校南伊豆分校とともに、久能こども園

が実践発表を行った。成果報告会より数日前に久能こども園園長、長尾光恵氏が静岡新聞「この人」(2017年2月2日)に取り上げられ、実践を具体的に広報することが可能となった。

4) こども園園長の企画による ESD・国際化カフェ

筑地純子氏(和田島こども園園長)の発案より、7月22日(土)、同園で ESD・国際化カフェが実施された。実践発表については、コンソーシアム事業の ESD コーディネーターの山本真津恵氏に企画するように依頼をした。発表は、和田島こども園、久能こども園、そして、有度北こども園の3園が行うこととなった。

有度北こども園は、保育園からこども園に移行した園であり、ユネスコスクールではない。発表に至った背景には、当時の東豊田幼稚園でユネスコスクール申請に教務主任として携わった鈴木富美子氏が人事異動で2015年4月有度北こども園園長として赴任し、ホールスクールでの新たな実践に着手した。2017年4月鈴木氏は再び東豊田こども園に園長として異動するが、ESDは有度北こども園に根付き、新園長のリーダーシップのもと複数の保育教諭でプレゼンテーションの準備を進め、カフェ当日に至った。

和田島こども園から発案のカフェにおける成果は以下の通りである。

- ・カフェを通して新たな実践を発掘することができた。
- ・ディスカッションの内容(実践者の発言より)

①ホールスクールの活動にするためのプロセスが明らかになった。

②今までの実践を ESD の視点で整理することで活動と活動のつながりが明確になり、カリキュラムマネジメントが可能となった。

③ESDを意識することで地域や家庭への活動のねらいにあった伝え方ができるようになった。

④保育者の主体性(失敗しても挑戦し続ける意欲)を引き出すことができた。

などである。

5) 他校種との実践交流

以下のイベントで他校種との実践交流を行った。

- ・ESD・国際化カフェ in 竜洋学府 10月4日(水) 久能こども園
- ・ESD・国際化カフェ in 駿河総合高等学校 10月12日(木) 和田島こども園
- ・東海地域ユネスコスクールフォーラム 11月18日(土) 中部大学名古屋キャンパス 東豊田こども園
- ・ESD 実践研修会/静岡県生活科・総合的学習教育学会第7回研究集会(静岡県生活科・総合的学習教育学会との共催) 11月25日(土) 静岡県教育会館

東豊田こども園

ESD の理念を軸とした実践交流は、発達段階、教育内容や教育方法の違いを越え、共通の課題でのディスカッションが可能となる。

6) 国際フォーラムへの参加

11月20日～22日 タイ「ESD 教員養成国際会議」にて、東豊田こども園園長が、富士市立岩松北小学校、静岡県立駿河総合高等学校の教諭らとともに実践を報告した。

7) ユネスコスクールの遊びと生活展

「幼稚園の遊びと生活展」を経験したユネスコスクールの園長らより、遊びと生活展の実施の依頼があった。前述の2014年の「幼稚園の遊びと生活展」は、教育学部からの発案で、企画や運営も教育学部教員が中心だった。今回は、企画、広報、運営、会場費負担はコンソーシアム、会場レイアウトと搬入・搬出はこども園というように役割を分担し実施するというのを9月に確認し、12月8～10日で実施された。

出展については、認定こども園に参加を募った。旧保育所も含め18のこども園の出展が決まり、ユネスコスクール5園の副園長を中心にレイアウトや搬入・搬出の計画がなされた。また、期間中に講演会や ESD・国際化カフェも同時開催した。準備や運営には静岡大学教育学部の学生が携わり、ESD の実践に加えて、会の運営などについても学ぶことが可能となった。3日間で、園関係者以外にも小学校・中学校教諭、保護者、地域の方など約400名が来場した。また、新聞や雑誌(静岡新聞2017年12月9日朝刊、



情報誌『クルール』2018年2月号に掲載)にもその模様が取り上げられた。

主な成果は以下の3点である。

- ・ グローバル・シティズンシップの育成の基礎となる協同的な遊びや活動を子どもたちが実際につくって遊んだものを通して実感することが可能となった。
- ・ ユネスコスクール以外のESDについても確認することができた(大谷こども園、西奈こども園、小河内こども園など)。
- ・ 実践者同士の学び合い、教職をめざす学生の学び場を創出した。

4 考察

(1) 第0期の存在と教員のキャリア形成

「ユネスコスクールの遊びと生活展」の実施に至るまでの過程を検証すると、ESDの推進拠点としての役割を担うまでに変容したユネスコスクールの姿を読み取ることができる。上記の結果は、ASPUnevNetの具体的な支援内容という視点から、3つの時期(「ESDとの出会いの創出」、「ユネスコスクール支援とESDの広報」、「静岡から国内外への発信」)に分けて整理を試みた。一方、支援者側の意図から整理し直すと、ESDとの出会いの場を創出する時期は「第1期 実践の価値付け期」、ユネスコスクール支援とESDの広報の時期は、「第2期 力量形成期」、静岡から国内外への発信の時期は、「第3期 発展期」と位置づけることができる。また、第1期から第3期に至る背景には、第0期の存在と教員のキャリア形成が大きく関わっているのではない。

2007年12月静岡市立日本平動物園園長の海野隆至氏(当時、統括主幹)の協力のもと、筆者の企画運営で幼稚園教諭のための環境教育研修会を当園で実施した。ESDを企画して研修会を企画したが、当時は「環境教育」という文言の方が先生方に理解していただきやすいだろうと判断し、環境教育研修会とした。この自主的な研修会には、当時、中堅教員として幼稚園に勤務されていた鳥羽美紀子氏(現、静岡市立由比こども園園長)を窓口に関係している先生方に研修会の広報をしていただいた。15名程度の教員が参加し、バックヤードの見学など特別な体験活動を取り入れながら、「いのちの博物館」である動物園を通してESDについて学ばれた。参加された先生方が後のユネスコスクール加盟の中心的な役割を果たしたといっても過言ではない。

0期中堅教員として勤務されていた鳥羽氏は、第1期、第2期には教務主任として、ユネスコスクール加盟申請書作成にも貢献された。そして第3期には園長として、ユネスコスクールの実践の指導や啓発活動も熱心に取り組まれている。また、I氏は、0期に教務主任として研修会に参加されていた。第1期、第2

期に園長として、ユネスコスクール加盟申請書作成に力を注がれた。また、退職後も「幼稚園の遊びと生活展」に来場するなど、幼稚園、こども園の教育活動を見守られている。

また、2017年12月実施のユネスコスクールの遊びと生活展では、ユネスコスクールの副園長を中心に運営がなされた。現園長らが持続可能な体制づくりも視野にいれ動いている様子が見受けられた。

(2) 支援体制の充実がユネスコスクールの自立を促進

2016年度、コンソーシアム事業が3年間の予定で開始された。予算の裏付けもあり、APSunivNetとしての支援よりも一歩進んだ支援が可能となった。

初年度は、コンソーシアムが主体となり、事業の企画や運営を行っていたが、2年目には、ユネスコスクールの園長の提案から事業がはじまり、共同で企画を進めていくことが可能となった。ESD・国際化カフェやユネスコスクールの遊びと生活展の実施は、ESDの推進拠点としての役割を果たすと同時に、園内研修の充実、保育の質の向上につながったといっても過言ではないだろう。例えば、ESD・国際化カフェで報告をされた有度北こども園の実践やユネスコスクールの遊びと生活展で展示されていた大谷こども園、西奈こども園、小河内こども園の実践は、ユネスコスクールという看板はないもののESDのすぐれた実践として発表することが可能である。

コンソーシアム事業がユネスコスクールを中心とした静岡市の幼児教育におけるESDの発展を保障したといってもよいだろう。

(3) 他校種の教員と同じ土俵での討議

幼児の興味や関心とは無関係に効率よく物事を教えていくよりも、幼児が興味や関心、必要感に基づき環境に働きかけ、発達に必要なものを獲得していく方が幼児の発達の特性に即しているという考え方から、幼児教育では「環境を通して行う教育」を基本としている。しかし、幼児教育の現場ですら、その理解が十分とはいえない。さらに、小学校以上の教員への「環境を通して行う教育」への理解を促すためには、同じ土俵を用意することが必要だ。

コンソーシアム事業では、ESD・国際化カフェ、ESD実践研修会など他校種との実践交流の場を設けた結果、ESDは校種を越えた土俵となり得ることが明らかになった。ESDの理念から幼小の接続カリキュラムの可能性を探ることが展望であり、課題であると考えられる。

5 研究の課題

静岡市の幼児教育におけるユネスコスクール、ESDの広がり、第2期にアクトローカリーを大切に実践してきた教務主任が中心となっていたことと

なっていた。彼女らは、ESD について十分な理解を持ち合わせていたわけではないが、感覚的に自身が実践で大切にしていることと ESD の共通点をみつけたのではないだろうか。また、子ども子育て支援新制度への移行という危機感もスピード感をもって、ESD が進展したように考える。

本稿では、ESD の「幼児期の取り組みは極めて少ない」（白石・加藤,2016）という指摘に対しての十分に応えているとはいえない。本当に「きわめて少ない」のか、単にユネスコスクール加盟校数が少ないということだけなのか、ESD 的な教育活動は実践されているが、実践者が意識していないだけなのか、今後の研究で明らかにしていきたい。

注)

- 1) 文部科学省 (2017) .初等教育資料 4 月号付録『幼稚園教育要領 小学校学習指導要領 全文』
- 2) ユネスコスクールとは、ユネスコ憲章に示されたユネスコの理念を実現するため、平和や国際的な連携を実践する学校であり、文部科学省及び日本ユネスコ国内委員会では、ユネスコスクールを ESD の推進拠点として位置付けている。
文部科学省ホームページ
<http://www.mext.go.jp/unesco/004/1339976.htm>
(2018 年 1 月 21 日閲覧)
- 3) ユネスコスクール加盟校一覧
ユネスコスクール公式ウェブサイト
<http://www.unesco-school.mext.go.jp/schoolslist/>
(2018 年 1 月 21 日閲覧)
- 4) 静岡市立幼稚園 14 園については、井川こども園（休園中）、清沢こども園を除いた 12 園は、幼保連携型認定こども園に移行した。
「平成 30 年 4 月～施設一覧」
静岡市ホームページ
<http://www.city.shizuoka.jp/000771280.pdf>
(2018 年 2 月 9 日閲覧)
- 5) 加盟大学では、以下の 4 つの支援を中心的に行っている。
「ユネスコスクール加盟支援」「ユネスコスクール活動実践」「ユネスコスクール地域間交流」「ユネスコスクール国際交流」
ユネスコスクール支援大学間ネットワーク ASPUnivNet ホームページ
http://www.unesco-school.mext.go.jp/ASPUnivNet/member_universities (2018 年 1 月 21 日閲覧)
- 6) コンソーシアムの役割は、以下の 4 つである。
「育成」「知的支援・助言」「発掘・発信」「つなげる」
ESD・国際化ふじのくにコンソーシアムホームページ

<http://esd-fuji.jp> (2018 年 1 月 21 日閲覧)

- 7) 砂山絵理子 (2016) 日経 DUAL「静岡市長 市立園すべて『こども園』化に懸けた思い」
<http://dual.nikkei.co.jp/article.aspx?id=7832&page=1> (2018 年 12 月 1 日閲覧)
- 8) 「2013 年度 ESD ユネスコスクール研修会報告書」
(平成 26 年 3 月静岡大学教育学部)
- 9) 「静岡県生活科・総合的学習教育学会第 4 回研究集会発表論文集」
第 4 回研究集会では、愛知教育大学教授 野田敦敬先生の講演（「生活科の教材開発と総合的学習の単元開発」）を受け、地域との連携、幼小連携、ESD をテーマとした実践発表がなされた。参加者は、幼稚園から大学までの教員 40 名。
- 10) 日本ユネスコ国内委員会 (2013) 『ユネスコスクールと持続可能な開発のための教育 (ESD) 』
- 11) 高須史子氏作成の発表原稿から

参考・引用文献

- ユーリア・エンゲストローム（山住勝広ら訳）
(1999) .拡張による学習：活動理論からのアプローチ.新曜社.
- 今村光章 (2011) 森のようちえんとは何か：用語「森のようちえん」の検討と日本への紹介をめぐって.環境教育 Vol.2No.1.59-67.
- 白石淑江・加藤望 (2016) 幼児期の持続可能な開発のための教育の国際的動向.愛知淑徳大学論集—福祉貢献学部篇—第 6 号.63-75.
- 蘇我幸代 (2016) 持続可能な社会の形成に向けた幼児教育に関する一考察：「人間存在を深める」子どもの遊びに注目して.名古屋市立大学人間文化研究科人間文化研究 25 号.49-61.
- 田宮縁 (2016) 幼児教育における ESD の意義と可能性：ユネスコスクールの実践の検討.静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）第 47 号.57-66.
- 森上史朗監修 (2017) 最新保育資料集.ミネルヴァ書房.